

ボルジギン・ブレンサインさん

蒙古国独立運動家

内モンゴルこそ、モンゴル理解の原点

いま、私たちがモンゴルと聞いてイメージするのはウランバートルを首都とする「モンゴル国」だろう。しかし、もう一つ、モンゴルがある。内モンゴルだ。歴史的に見て、内モンゴルこそが、日本にとって最初のモンゴルとの出会いであり、敗戦まで深い関係があった。

「モンゴル」とはどこか

——昨年刊行された、ご自身のふるさとである中国・内モンゴル自治区の歴史や日本との関係をわかりやすく書いた『内モンゴルを知るための60章』（明石書店）が話題を集めています。日本で初めての一般向け内モンゴル入門書といえますね。

「モンゴル」と聞いて、多くの人がイメージするのはモンゴル国ではないでしょうか。しかし、歴史を振り返ると日本人と関わりが深いのは中国の内モンゴル自

治区なんです。しかし残念ながら、いま内モンゴルに興味を示す人は少ないのが現実です。

——確かに日本人にとって「モンゴル」は、中国北部に位置する少数民族であるモンゴル族の自治区ではなく、さらに北のモンゴル国です。なぜ内モンゴルは日本人の視野から消えてしまったのでしょうか。

戦前まで日本は、現在の内モンゴルの東部地域を満洲国の一部として、中西部地域を「蒙疆政權」といわれるモンゴル人の国家を通して、支配していました。日本と内モンゴルの出会いは、内モンゴルの人々にとっても、日本人にとっても歴史の記憶として刻まれて

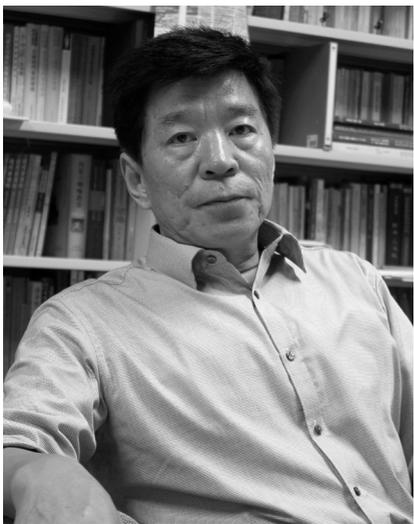
います。また戦前は多くの日本人が内モンゴルを旅したり、さまざまな仕事に携わったりして内モンゴルの人々と深く関わってきました。

しかし太平洋戦争の敗戦を機に交流が断絶してしまつた。その後、日本が中国とモンゴル国（当時はモンゴル人民共和国）と国交を樹立したのは一九七二年。けれども、一般的な日本人が内モンゴルに入れるようになったのは一九八〇年代に入ってからです。その数十年の間、日本人は内モンゴルに触れることができず、リアリティが失われてしまつたんです。同時に日本人にとって、植民地として支配した内モンゴルと向き合う

のは戦争のつらい記憶を直視することでもあります。一方のモンゴル国は、モンゴル民族唯一の独立国として存在している。開墾と入植で多くの漢民族を受け入れている内モンゴルよりも、いまなお牧歌的な遊牧を続け、イメージ通りの草原が広がる民主主義国家であるモンゴルを旅するほうが日本人にとって楽なのではないかと思えます。

内モンゴルは、モンゴル国の陰に隠れて日本人の視野から消えてしまったといえるでしょう。しかし戦前日本は内モンゴルを通して「モンゴル」と出合いました。だから内モンゴルは日本人のモンゴル理解の原点なんです。内モンゴルを知らない限り「モンゴル」を理解できないといってもいいのではないかと思うのです。

——日本人にとって、もともと内モンゴルが「モンゴル」だったというわけですね。とても面白い話ですね。逆に私たち内モンゴルの人々から見れば、日本で学ぶことが、自分たちのモンゴル民族のアイデンティティを知る手がかりになります。そう考えているのは私だけではありません。内モンゴルの知識人の多くが同じ思いを抱いているはずですよ。



●ボルジギン・ブレンサイン 内モンゴル大学卒業。内モンゴル自治区のラジオ放送局で7年間記者を務めたのち、1992年来日。